

補訂版

國書總目錄

著者別索引

岩波書店刊行

題字 安倍能成

編纂の辞

岩波書店が創業五十年の記念事業として企画した『国書総目録』の第一巻が刊行されたのは、昭和三十八年のことであった。さらに溯れば、新村出・辻善之助両博士が、岩波書店の先代岩波茂雄氏と相諮って、『国書解題』編纂の発意をしてから今日まで、四十年に近い歳月が過ぎ去ったことになる。

両博士の意を体して編纂された『国書総目録』の意図は、先人から受け継いだ文化的遺産のうち、典籍に限って確認することにほかならないが、その編集作業の苦難を通して、一国の文化の無辺際であることをあらためて得心したものである。これらの龐大な古書目の一つ一つを検討しながら、仏典研究に没頭する善知識や、克明な記録を記し続ける中世の貴族、あるいは自らの疑義を追求して止まぬ市井の学者等、大きな歴史の流れの中に没し去った、多くの秀れた先学の姿を、幾度か眼前に見る思いがあった。『国書総目録 著者別索引』企画の遠因は、こんな夢のようなところにあっただけであろう。

こうして、『国書総目録』の編纂に携わるかたわら、著者別の書名目録を刊行したいと考えていたが、総目録の完成した後、別巻として「著者別索引」の名の下に公刊することに踏み切った。種々の点でその意義の少なくないことを信じたからである。しかし、はじめは比較的容易に思われたこの編纂も、実際に着手してみると、幾多の難関につき当たった。まず、このような明治以前の全分野にわたる総合的な著者別の書目一覧は前例のないことであるし、従来の類書に一切の伝記的解説を持たない人達や、多くの分野に別名・異称をもって活躍する人物の存在が、作業の進捗を渋らせた。一方、この編集作業を通して、『国書総目録』編纂当時の誤った判断および記述の発見も多くあったことを告白せざるをえない。このことは当初予期しなかったことではあるが、『国書総目録』の再検討と修正ということが、本索引編纂の大きな副産物であったといってもよいかと思う。

昭和四十七年、第八巻の刊行を終えてからすでに四年、予想していたよりはるかに多くの時間を費した。それにしても、今日この索引を世に送ることができたのは、『国書総目録』のときと同様に、多数の方々の温い御援助を得たからである。いまさらのごとく、学恩のあり

がたさを痛感するものである。まず、益田宗、久保田淳、篠原昭二の三氏には、『国書総目録』以来、ひき続いてこの索引編集の中心として御協力願った。その他、青方智登、秋谷省三、内田保広、奥田勲、窪田よし、小池正胤、信多純一、島田貞一、鈴木勝忠、鈴木重三、多治比郁夫、谷山央、土田衛、中村俊定、野間光辰、橋本不美男、服部幸雄、原道生、樋口秀雄、日野龍夫、檜谷昭彦、古川久、森川昭、頼惟勤、和田久徳などの諸氏には、それぞれの御専門の立場から、有益な御教示を頂いた。ここに心からの感謝の意を表したい。また、岩波書店の社長岩波雄二郎氏をはじめ担当の方々には、我儘勝手を申しあげたにもかかわらず、御懇篤な御配慮御助力を頂いた。御芳情に対し、厚く御礼を申し上げる次第である。

昭和五十一年十月

森末義彰
市古貞次
堤精二

凡例

- 一、本索引は『国書総目録』に収録された書目の著者を検出するためのものとして編集した。また、同時に、著者別の著述一覧の作製をも意図するものである。したがって、この索引では『国書総目録』の巻・頁・段を指示するにとどめず、書名(『国書総目録』の項目名)をも記載した。
- 二、本索引の記載事項は、著作者名(項目名)・別称・書名・成立・巻頁段である。

項目

1. 『国書総目録』(以下「本巻」とよぶ)の著編者欄(●欄)に記載されている著作者名をもって項目とした。また、本巻備考欄(*欄)に注記された人名等の中から、その書物の著作者と考えられるものを適宜加えた。ただし、本巻の著編者欄・備考欄に記載されるもののうち、次に挙げるような類は項目として採用しなかった。
 - イ、外国人(翻訳書の原著者など)
 - ロ、序・跋者(ただし、著者・編者とみなされる場合は採用した)
 - ハ、歌合の詠者(ただし、自歌合の詠者は採用した)
 - ニ、連歌懐紙における四人目以下の詠者(発句・脇句・第三の詠者のみ採用した)
2. 本巻中、同一著者で二種以上の名称をもつものは、次のような法則で項目名を決めて一項目にまとめた。
 - イ、一般に人名は(〈姓氏・名〉)の形を原則としたが、例外的に(〈姓氏・号〉〈姓氏・字〉〈姓氏・通称〉等の形をとったものもある。
 - ロ、漢学者および漢詩人は(〈姓氏・号〉)の形を項目名とした。
 - ハ、多くの称号を所有したり、雅号等が変化している著者は、主たる

活動領域、あるいは主要な時期の名称を項目名とした。

ニ、親王・法親王・入道親王は区別をせず、すべて親王に統一した。

ホ、僧侶は原則として法諱を項目名としたが、本巻中の記載が法字・法号等のみで、法諱の不明のものは、本巻に記載されたものを項目名とした。ただし、禅宗の僧侶は原則的に法諱に法号(あるいは法字等)を加えた四字の名称を項目名とした。

ヘ、一般に雅号の類は庵号(軒号・齋号……等)を付けた形で掲げたが、俳人・連歌師は庵号等を除いた形を項目名とした。

ト、江戸時代の小説家は戯号をもって項目名とした。

3. 同一名称の著者が何人かいる場合は、次のような法則で項目を立てた。

イ、名称が同じで何人かの別人のいる場合は、それぞれ別個の項目として立てたが、判別できない時は、便宜上項目の肩に×印をつけてまとめ項目であることを示した。

ロ、花道・茶道・香道・囲碁・将棋・俳諧・狂歌等の宗匠や、劇作者・俳優・絵師など、同一称呼を数代にわたって襲名するものは一項目にまとめ、その項目の中で、「」印を用いて各世代に分けて記した。なお、何代目であるか不明のものは、まとめてその項目の最後に「？」として記した。

ハ、……家、……氏、……某の類は一括し、それぞれ(家)、(氏)、(某)と小書きして、まとめ項目の×印はつけなかった。

よみと排列

1. 項目の排列の順序を示すために、振り仮名を施した。

イ、(〈姓氏・名〉(〈姓氏・号〉等)の項目は姓氏の部分で切り、その姓氏に振り仮名を施した。なお、同一姓氏の項目が続く場合は、その最初の項目にのみ施すこととした。

ロ、庵号(軒号・齋号等)を付けた項目名は、(〈姓氏・名〉)の項目に準じ

て、その部分で切って振り仮名を施した。振り仮名の省略に関しても前項に同じである。

ハ、同一表記の姓氏で異なった読み方のあるものは、適宜参照項目を立てて検索の便を図った。

a. 便宜上、一方のよみに統一した場合は、他方から↓印で指示した。

(例) 小幡(たば)…… ↓小幡(たば)……

b. 二個所以上の位置により分けて排列した場合は、それぞれの項目から↓印で他方を指示した。

(例) 石上(いしかみ)…… ↓石上(いしかみ)……

石上(いしかみ)…… ↓石上(いしかみ)……

2. 姓氏につづく名・号等のよみと、僧侶名およびよみの決定できない項目は音読した。なお、親王名もすべて音読とした。

イ、音読の場合は、もっとも通常の音を採用した。通常二様以上の音を用いられる左の文字については便宜上括弧内の音に統一した。

(*印の文字は次項参照)

| | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| 一 (いち) | 乙 (おつ) | 丁 (てい) | 九 (きゅう) |
| 二 (に) | 人 (じん) | 万 (ばん) | 大 (たい) |
| 今 (こん) | * 仁 (じん) | 元 (げん) | 太 (たい) |
| 文 (ぶん) | 日 (にち) | 木 (ぼく) | 世 (せい) |
| 巨 (きょ) | 正 (せい) | 生 (せい) | 吉 (きち) |
| * 如 (じょ) | * 成 (せい) | 色 (しよく) | 行 (ぎょう) |
| 西 (せい) | 宗 (そう) | * 定 (てい) | 性 (せい) |
| 易 (えき) | 明 (めい) | 治 (ち) | 物 (ぶつ) |
| 直 (ちよく) | 竺 (じく) | 弥 (び) | * 金 (きん) |
| 後 (ご) | 洞 (どう) | 省 (せい) | 貞 (てい) |
| 重 (ちよう) | 香 (こう) | 宮 (きゅう) | * 惠 (けい) |
| 益 (えき) | 華 (か) | 乾 (かん) | 寂 (じゃく) |

崇 (しゅう) 眼 (がん) * 經 (けい) 郷 (きょう)

黄 (おう) 卿 (けい) 御 (ぎよ) * 然 (ぜん)

象 (しょう) 業 (ぎょう) 極 (きよく) * 聖 (せい)

緒 (しよ) 聚 (しゅ) 聞 (ぶん) 静 (せい)

* 慧 (けい) 権 (けん) 興 (きょう) 諦 (てい)

懷 (かい) 嚴 (げん)

ロ、僧侶名の場合、前項の統一とは別に、左の文字は括弧内の音に統一した。

一 (いち) 仁 (にん) 如 (にょ) 成 (じょう) 定 (じょう)

金 (こん) 惠 (え) 經 (きょう) 然 (ねん)

聖 (しょう) 慧 (え)

3. 中国人名に摸して修した姓は、本来音読するものであるが、訓読する一字の姓氏との識別がむづかしいので、訓読する姓氏が他に項目としてある場合は、統一的に訓読の位置に配し、訓読の姓氏がない場合は音読して排列した。

(例) 島元煥 原能興などは「とう」「げん」と音読せず、「しま」「はら」姓の中にそれぞれ排列した。

安蘭園 野子賤などは訓読する姓氏がないので「あん」「や」とよんでそれぞれ排列した。

4. 排列は項目の振り仮名の五十音順による。ただし、「ぢ」「づ」は「じ」「ず」の順位に、助詞の「へ」「を」「は」「は」「え」「お」「わ」の順位に排列した。

5. 同一姓氏(同一庵号)等の中は、名・号等を音読して(2.イ参照)排列した。

6. 五十音順で順序のきまらない項目は次のように排列した。
イ、清音・濁音・半濁音の順にした。

ロ、片仮名表記・平仮名表記・漢字表記の順にした。

ハ、同音の漢字表記の排列は、画数の少ないものを先にし、一音一字

は二音一字の先にした。
二、同音同表記の項目の排列は、その著者のおおよその活躍時期の順にした。

別称

1. 本巻中、同一著者に二種以上の名称のある時は、項目に立てた名称以外のものを、項目の下に（ ）を付して記した。
2. 別称は本巻記載の名称を原則とするが、例外として、参考文献等により補ったものもある。
3. 項目名の姓氏と異なるものは、別称欄に姓氏の形で表記した。

書名

1. 本書は著者名索引であるが、前述のように、著述一覧としての利点も考慮し、その項目が指示する検出個所の書名をも記した。
2. 書名とその著者との関係を、書名の下に小書きで略記した。本巻では、この両者の関係を多様の表現で記述しているが、この索引においては、委細を本巻に譲り、次の十三種の略号であらわすことにした。
なお、純粹にその人の著作であるものは無表記とし、江戸時代における戯作、小説類等は画家と区別する意味で「作」を使用した。
作・編・画・評・注・訳・伝・書・校・補・受・判・問
3. 本巻中で著作者に「伝……」「……」等の表現で、その書目と著作者の関係になんらかの疑問が付されている場合、この索引では、その著作者の項目の末尾に、それらの書名を*印の下に列記した。なお、本巻備考欄に「偽書」とあるものも同様の取り扱いをした。

成立

1. 項目となっている著作者の、おおよその活躍時期を示すために、本巻成立欄(◎欄)記載の年記を書名の下に（ ）印で囲んで記した。な

お、本巻備考欄(*欄)の記述の中から適宜選んで採用した場合もある。
2. 本巻の成立欄記載の年記が、著者の活躍時期と隔っている場合や、その表現が非常に広範囲の期間をあらわす場合は記さなかった。

巻・頁・段の表記

1. それぞれの書名の本巻に記載されている位置を示すために、巻・頁・段を次のようにあらわした。
巻数 ①……⑧
頁数 平活字和数字
段数 洋数字

著者別索引

